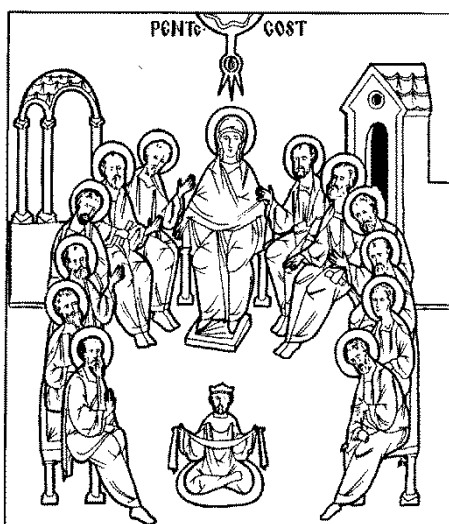


聖神降臨祭

五旬祭



徹夜禱

2015年7月

聖神降臨祭（五旬祭）

晩 課

首唱聖詠、大連禱

カフィズマ（悪人の謀、小連禱）

祭-1

「主よ爾によぶ」に八句を立てて。自調の讃頌 第一調

主や汝によぶすみやかに我れにいたりたまえ 主や
われに聞きたま え 主や汝に呼ぶすみやかに我れに
いたりたまえ 汝に呼ぶときわが祈りの声をいれたま え
主やわれに聞きたま え ねがわくはわがいのりは
香炉かまどのかおりのごとく 汝がかんはせのまえにのほり
わが手をあぐるはくれの祭のごとくいれられん主や
われにききたま え

晩課の聖詠 140, 141, 129, 116 聖詠の読み（省略）

(句) 主よ、我深き處より爾に呼ぶ。主よ、我が聲を聴き給へ。

我等五旬祭及び聖神^oの降臨、許約の成就、冀望(きぼう)の満足を祝ふ、是くの如き機密、此れ如何に大にして尊き、故に我等爾に呼ぶ、主万有の造成者よ、光榮は爾に歸す。

(句) 願はくは爾の耳は我が禱の聲を聴き納れん。

ハリストスよ、爾は異族の方言を以て爾の門徒を新にせり、彼等が此を以て爾死せざる言及び神、我等の靈に大なる憐を賜ふ主を伝へん為なり。

(句) 主よ、若し爾不法を糾さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、人の爾の前に敬ま ん為なり。

聖神^oは万事を備ふ、預言を流し、司祭を成全し、無学者に智慧を誨へ、漁者を神学者と為し、教会の十切の律例を設く、父及び子と一体にして同座なる撫恤者よ、光榮は爾に歸す。

(句) 主を望み、我が靈主を望み、彼の言を待む。

第二調

我等已に眞の光を觀、天の聖神^oを受け、正しき信を得て、分れざる聖三者を拝む、彼我等を救ひ給へばなり。

(句) 我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

我等の救世主よ、爾は預言者を以て我等に救の道を示し、使徒を以て爾の聖神^oの恩寵を照し給へり、爾は始の神なり、爾は其後にも、亦世世にも我等の神なり。

(句) 願はくはイズライリは主を待まん、蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、彼はイズライリを 其の悉くの不法より贖はん。

主よ、我爾の宮に於て爾世界の救主を歌ひ、膝を屈めて爾の勝たれぬ力を拝み、晩と朝と午と、又何の時に於ても爾を崇め讃めん。

(句) 萬民よ、主を讃め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讃めよ。

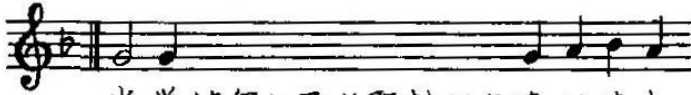
主よ、我等信者は爾の宮に於て靈と体との膝を屈めて、爾無原の父、同無原の子、同永在にして至聖なる神^o、我等の靈を照して聖にする者を讃め歌ふ。

(句) 蓋彼が我等に施す憐は大なり、主の眞實は永く存す。

我等は一体の三者、父と子と聖神^oとを讃め歌はん、斯く悉くの預言者及び使徒は致命者と偕に伝へたればなり。

光榮 今も 生神女讃詞 第八調 帝レオの作 (楽譜次頁)

人人よ、来りて、三位の神性、父及び其中に居る子と聖神^oとに伏拝せん、蓋父は世世の前に 同永在 同宝座の子を生み、子と偕に讃榮せらるる聖神^oも父の中に居りき、惟一の力、惟一の性、惟一の神なり。我等皆彼に伏拝して曰ふ、聖なる神、子を以て聖神^oの共動に依りて 万有を造りし者、聖なる勇毅、我等に父を識らしめ、聖神^oを世に来らしめし者、聖なる常生の者、撫恤の神^o、父より出で、子の中に息ふ者なり、聖なる三者よ、光榮は爾に歸す。



光栄は父と子と聖神にきすいまも

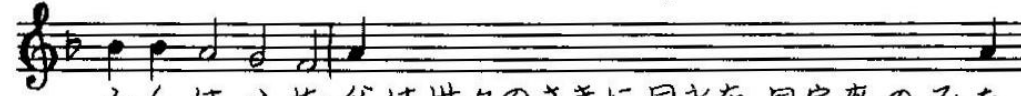


(ステヒラ)

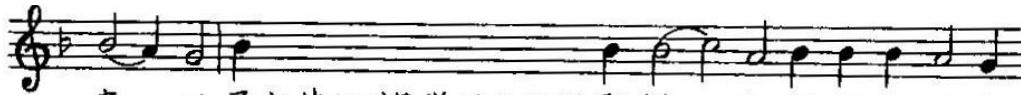
いつも世 世にアミン ひとびとや来たりて三位



のしせ い父およびそのうちに居る子と聖神とに



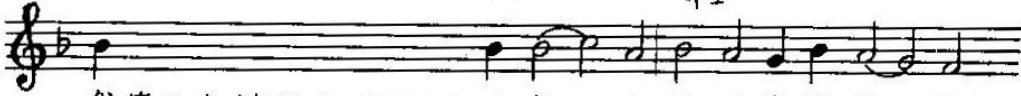
ふくはいせん 父は世々のさきに同永在 同宝座の子を



産み子と共に讃栄せらるる聖神 もちちのうち



におれり 唯一の力、唯一のせい 唯一の神なり



我等みな彼れに伏拝して言 うせいなるかみ



子をもつて聖神の共働によりて万有をつくりしもの



せいなる勇 気我等に父を知らしめ聖神を世に来たら



しめしものせいなる勇 せいのも のぶじゆつ の神



ちちよりい でこのうちにい こゝもの なりせいなる



三者や光えいはなんじに帰す

→通常部分 (P7/8「聖にして福たる」へ戻る)

【スポタのポロキメン】（6調）第92聖詠1—5

主は王たり、彼は威厳を衣たり、（句）主は能力を衣、又之を帯にせり、（句）故に世界は堅固にして動かざらん、（句）主や、聖徳は爾の家に属して永途に至らん、



（ポロキメンの後）

祭-2

パレミヤ（旧約聖書の読み）

【民数記の読み】 11:16, 17, 24~29

主はモイセイに謂えり、イズライリの長老の中七十人、爾が自らを知る所の民の長老たり有司たる者を集めて、證詞の幕に攜え来たり、彼處に爾と偕に立たしめよ、我降りて、彼處に爾と偕に語り、爾に在る所の神を分ちて、彼等に賦えん、彼等爾と偕に民の任を負いて、爾一人にて之を負うことなからしめん。モイセイ民の長老の中より七十人を集めて、之を幕の周囲に立たしめれば、主は雲の中に降りて、モイセイに語り、彼に在る所の神を分ちて、七十人の長老に賦えたり。神彼等に宿りたれば、彼等預言せり、此の後は復之を為さざりき。二人営の中に留まれり、一の名はエルダト、一の名はモダドなり、神彼等に宿れり、彼等は注されたる者の中に在りしが、幕に往かざりき、彼等営の中に預言せり。一の少者奔り来たりて、モイセイに告げて曰えり、エルダト及びモダドは営の中に預言す。モイセイの侍者、其の簡ばれたる者、ナフィンの子イイスス對えて曰えり。主モイセイよ、彼等に禁ぜよ。モイセイ彼に謂えり、爾吾が為に熱中するか、嗚呼願わくは主の民悉く預言者と為り、主は其の神を彼等に降さんことを。

【イオイリの預言書の読み】 2:23~32

主是くの如く言ふ、シオンの諸子よ、爾等も主爾の神の為に喜びて楽しめよ、蓋彼は爾等に宜しきに合いて雨を賜い、前の如く、爾等に早き雨と晩の雨とを降らさん。禾場には穀物盈ち、甕には葡萄汁と油とは溢れん。我が爾等に遣わしし我が大軍たる蝗、毛虫、黄金虫、螟蛉の蝕い盡しし年の為に、我爾等に賠わん。爾等飽くまで食らいて飽き足り、主爾等の神、奇妙なる事を爾等に行いし者の名を讃め揚げん、我が民は世々に羞を得ざらん。爾等は我がイズライリの中に在り、我が主爾等の神にして、他に之れ無きを知らん、我が民は世々に羞を得ざらん。其の後我は我が神を以て凡その肉体に注がん、爾等の子女は預言し、爾等の老いたる者は夢の兆しを見、爾等の若き者は異象を見ん。彼の日に於て、我は、我が神を以て、我が僕及び我が婢に注がん、則彼等は預言せん。我奇蹟を上なる天に、休徴を下なる地に施さん、血と火と烟りとあらん。日は晦冥に、月は血に変ぜん、此れ主の大いにして光荣なる日の未だ来らざる先に在らん。凡そ主の名をよばん者は救いを得ん。

【イエゼキイリの預言書の読み】 36:24~28

主是くの如く言う、我爾等を諸民の中より取り、諸国の中より集め、導きて爾等の地に入れん。我爾等

に清き水を灑がん、爾等は悉くの汚穢より潔くならん、我爾等を悉くの偶像より潔めん。新たなる心を爾等に與え、新たなる神を爾等に與えん、爾等の肉より石の心を取りて、肉の心を爾等に與えん。我が神を爾等の衷に入れ、爾等をして我が誠めに従わしめ、我が律を守りて之を行わしめん。爾等は我が爾等の先祖に與えし地に住みて、我の民と為り、我は爾等の神と為らん。

→通常部分 P10 重連禱へ戻る

(増連禱が終わったら)

祭-3

リティヤのスティヒラ

我等の 救 生 主 よ 爾 は 預 言 者 を 以 て 我 等 に 救 い の 道 を し め し
 使 徒 を 以 て 爾 の 聖 神 の 恩 籠 を 照 ら し た ま え り
 爾 は 初 め の 神 な り 爾 は そ の 後 に も ま た 世 世 に も
 わ れ ら の か み な り

自調の讃頌三章 第二調

我等の救世主よ、爾は預言者を以て我等に救の道を示し、使徒を以て爾の聖神^oの恩籠を照し給へり、爾は始の神なり、爾は其後にも、亦世世にも我等の神なり。

主よ、我爾の宮に於て爾世界の救主を歌ひ、膝を屈めて爾の勝たれぬ力を拝み、晩と朝と午と、又何の時に於ても爾を崇め讃めん。

主よ、我等信者は爾の宮に於て霊と体との膝を屈めて、爾無原の父、同無原の子、同永在にして至聖なる神^o、我等の霊を照して聖にする者を讃め歌ふ。

光荣 今も 第八調

主よ、爾坐せる使徒等に爾の神^oを遣しし時、エウレイの諸子を見て驚き異しめり、彼等が聖神^oの子ふる如き異なる方言を言ふを聞きたればなり、蓋無智なる者は智者と為り、神聖なる事を宣べて、異邦

人を信に進めたり、故に我等も爾に呼ぶ、地に現れて、我等を迷より救ひし主よ、光栄は爾に帰す。

→通常部分へ戻る。 P11 リティヤへ

(リティヤが終わったら)

祭-4 挿句のスティヒラ

自調の讃頌 第六調

主よ、民は至聖神[°]の爾の使徒に感ぜし力を暁らずして、言語の変化を酒の酔と意へり、我等は彼等に堅められて、斯く絶えずして曰ふ、人を愛する主よ、祈る、爾の聖神[°]を我等より取り上ぐる事母れ。

句 神よ、潔き心を我に造れ、正しき霊を私の衷に改め給へ。

主よ、聖神[°]の降臨は爾の使徒に及びて、彼等が異なる言を以て言ふを致せり、此の至榮なる事は不信者には酒の酔と意はれ、信者には救の縁由となれり、人を愛する主よ、爾に祈る、我等にも其光照を受くるに勝へさせ給へ。

句 我を爾の顔より逐ふ事母れ、爾の聖神[°]を我より取り上ぐる事母れ。

天の王、慰むる者よ、眞實の神[°]、在らざる所なき者、満たざる所なき者よ、万善の宝蔵なる者、生命を賜ふ主よ、来りて我等の中に居り、我等を諸の穢より潔くせよ、至善者よ、我等の霊を救ひ給へ。

光栄 今も 第八調

昔は塔を建つる者の狂暴の為に言は淆されたり、今は神学の光栄の為に言は暁り易くなりたり、彼には神罰を以て不虔者を定罪せり、此にはハリストス聖神[°]を以て漁者を照せり、其時合一は失はれて苦を致し、今合同は新にせられて我が霊の救を致す。

→通常部分 P13 「シメオンの祝文」へ戻る

「聖三祝文」「至聖三者」「天主経」

司祭 ^{けだし}蓋国と権能と光栄は爾父と子と聖神[°]に帰す、今も何時も^{いつ}世世に、

(詠) 「アミン」

(アミンに続いて)

祭-5

祭日のトロパリ 3回 祭日の發放讃詞 第八調

崇め讃めらるる哉／ハリストス我等の神よ、爾は漁者に聖神[°]を遣して／睿智者と為し、彼等を以て／世界を漁し得たり、人を愛する主よ、／光栄は爾に帰す。(楽譜次ページ)

The musical score is written on four staves in a single system. The key signature has one flat (B-flat), and the time signature is common time (C). The lyrics are written below the notes, with some characters having small superscripts above them. The lyrics are: あがめ^ほ讃めらるかな ハリストス 我等の かみよ なんじは^{ぎよ}漁者に^{しゃ} 聖神を^{つか} 遣わして^{えい} 睿智者と^ち なし かれ等を以て 世界を^{ぎよ} 漁しえたり ひとを愛する主や、光栄はなんじに帰す

光栄は

崇め讃めらるる哉…

3回

今も

崇め讃めらるる哉…

→通常部分 P14 五餅の祝福「主に祈らん」～「願わくは主の名は崇めほめられ……」へ戻る。

早 課

来たれ…、六段の聖詠、大連禱に続いて

<カフィズマ、セダレンは省略>

祭-6

主は神なり、祭日トロパリ 8 調

主は神なり我等を照せり、主の名に依りて来る者は崇め讃めらる、

(第1句) 主を尊み讃めよ、彼は仁慈にして其憐は世世にあればなり、

(第2句) 彼等我を囲み我を環れども、我主の名を以て之を敗れり、

(第3句) 我死せず、猶生きて主の行ふ所を伝へん、

(第4句) 工師が棄てし所の石は屋隅の首石となれり、是主のなす所にして我等の目に奇異なりとす、



→通常部分へ戻る P17【ポリエレイ】へ

<ポリエレイ後のセダレン省略>

ポリエレイに続いて

祭-7

【讃歌】（讃歌はロシア系のみ伝統なので祭日経には出ていない。▽**接続歌集 P342**）

※炉儀が終わるまで繰り返す。3 回とは限らない。接続歌集には下記の句を挿入し、最後にアリルイヤを歌うように指示がある。

ズナメニイ

い - のちをたまう ハリス トス や、
 わ れ ら なん じ を 讃 揚 し て
 なん じ が ち ち よ り 神 聖 な る 門 徒 に
 つ か わ し し なん じ の 至 聖 神 を 尊 - - - む
 ア リ ル イ ヤ ア リ ル イ ヤ ア - リ ル - イ ヤ

(句) 諸天は神の光榮を傳へ、穹蒼は其手の作為を誥ぐ。

(句) 天の全軍は其口の氣にて造られたり。

(句) 主は天より鑑みて、悉くの人の子を視る。(後略)

光榮、今も、「アリルイヤ」、三次。

→**通常部分 P18 へ戻る**

【小連禱】【アンティフォン】 4 調

祭-8

提綱、第四調。▽**祭日経 P754**

ねがわくは 爾の善なる神^oは 我を 義の地に みちびかん

句 主よ、我が禱を聆き、爾の眞實に依りて我が願に耳を傾けよ。

(そのまま続けて)

【福音の読み】

輔祭 主に祷らん、

(詠) 主、憐れめよ

司祭 (高声) 蓋我が神や、爾は聖にして聖なる者の中に居る、我等光栄を爾父と子と聖神に献ず、
今も何時も世世に、

(詠) 「アミン」

輔祭 凡そ呼吸ある者は主を讃め揚げよ、

(詠) 凡そ呼吸ある者は主を讃め揚げよ、

輔祭 (句) 神を其聖所に讃め揚げよ、彼を其有力の穹蒼に讃め揚げよ、

(詠) 凡そ呼吸ある者は主を讃め揚げよ、

輔祭 凡そ呼吸ある者は

(詠) 主を讃め揚げよ、

輔祭 我等に聖福音経を聴くを賜うを主・神に祷らん、

(詠) 主憐めよ、3次

輔祭 睿智肅みて立て、聖福音経を聴くべし、

司祭 衆人に平安、

(詠) 爾の神にも、

司祭 ルカ伝の聖福音経の読み、

(詠) 主や、光栄は爾に帰す、光栄は爾に帰す、

輔祭 謹みて聴くべし

福音経はイオアン 20:19~23

彼の時即七日の首の日、既に暮れて、門徒の集れる處の門、イウデヤ人を懼るゝに因りて、閉ぢたるに、
イイスス来りて、中に立ちて、彼等に謂ふ、爾等に平安。此を言ひて、彼等に己の手足及び脅を示せり。
門徒主を見て喜べり。イイスス復彼等に謂へり、爾等に平安、父が我を遣しゝ如く、我も亦爾等を遣す。
此を言ひて、氣を嘘きて、彼等に謂ふ、聖神を受けよ。爾等人に其罪を積さば、則積さる、人に其罪を
留めば、則留めらる。

祭-9

福音後のステイヒラ (交替で祝福を受けに行く)

「ハリストスの復活を見て」を歌はずして直に**第五十聖詠**を誦す。

[→通常部分 P18 へ戻る](#) 【第 50 聖詠誦読】

50 聖詠に続いて

光栄は父と子と聖神に帰す

憐み深き主よ、聖使徒の祈禱に依りて¹、我等の多くの罪を潔め給え。今も何時も世々に「アミン」
 憐み深き主よ、生神女の祈禱に依りて、我等の多くの罪を潔め給へ。

(第6調)

神よ、爾の大いなる憐みに因りて、我を憐み、爾が恵みの多きに因りて我の不法を抹し給え。

光えいはちちとことせいしんに_キ帰すあわれみ
 ふかき主や聖使徒の祈禱によつて我等の多くの罪を
 きよめたまえいまもいつも世世に
 アミンあわれみふかき主や至聖なる生神女の祈禱_{シセイ}
 によつて我等の多くの罪をきよめたまえ
 神や汝の大いなるあわれみによつてわれをあわれみ
 なんじがめぐみの大きによつてわれの不法を消し
 たまえ

スティヒラ 第六調

天の王、慰むる者よ、真実の神^o、在らざる所なき者、満たざる所なき者よ、万善の宝蔵なる者、生命を賜ふ主よ、来りて我等の中に居り、我等を諸の穢より潔くせよ、至善者よ、我等の霊を救ひ給へ。

→通常部分 P20 へ戻る 【輔祭「神よ、爾の大いなる憐れみによって…」と「主憐れめよ」12回】

¹ 『連接歌集』では「聖使徒の祈禱に依りて、憐れみ深き主よ……」、「生神女の祈禱に依りて、憐れみ深き主よ」

(アミンに続けて)

祭-10

カノン

祭日の規程二篇を歌ふ。

第1の規程 修士コスマの作 第七調

第一歌頌

イルモス 高き臂にて敵を敗る主は海を以てファラオンと其兵車とを覆ひ給へり、我等彼に歌はん、其光榮著れたればなり。

第1歌頌

たかき^{ひじ}臂にて 敵をやぶる 主は海^{うみ}を以て

ファラオンと その^{いくさぐるま}兵車とを おおえり

^{われ}我等彼にうたわん その光榮 顕れたればなり

附唱 至聖三者、我等の神よ、光榮は爾に帰す。以下每句之を附す

ハリストス、人を愛するよ、爾は嘗て門徒に約せし如く、實に撫恤者聖神^oを遣して、世界に光を照し給へり。

附唱 至聖三者、我等の神よ、光榮は爾に帰す。

昔律法と諸預言者と伝へし事は應へり、蓋今神聖なる神^oの恩寵は衆信者に注がれたり。

第2の規程 ダマスクの聖イオアンの作 第四調

第一歌頌

附唱 至聖三者、我等の神よ、光榮は爾に帰す。

イルモス 神妙の黒闇に蔽はれたる口鈍き者は神が録しし律法を述べたり、蓋彼は智慧の目より不浄を掃ひて、永在者を見、聖神^oを知る智識を蒙りて、神聖の歌を以て之を崇め讃む。

附唱 至聖三者、我等の神よ、光榮は爾に帰す。

聖にして尊き口は曰へり、友よ、我爾等と別れざらん、蓋我父の至上なる宝座に坐して、光照せられんことを望む者に竭きざる聖神^oの恩寵を注がん。

光榮は、今も

極めて真なる言は期に迨びて門徒の心を安んぜしむ、蓋ハリストスは事を畢へ、其友を楽しまして、曾て約せし如く、迅しき風と火の舌とを以て彼等に聖神^oを賜へり。

共頌「高き臂にて」 「神妙の黒闇に」

第三歌頌

イルモス ハリストスよ、爾門徒に言へり、上より能力を衣するに迄るまで、イエルサリムに居れ、我は他の撫恤者、我に似たる者、我及び父の神^oを遣さん、爾等彼に固められん。

第3歌頌

ハリストスよ、なんじ 門-徒に言えり
 うえより ちからをき衣するに いたるまで
 イエルサリムに居れ 我は 他の 撫 恤 者
 我に 似たるもの 我及び 父の 神^oを
 つかわさん 爾等 かれに かためられん

附唱 至聖三者、我等の神よ、光栄は爾に帰す。

神聖なる神^oの降臨せし能力は、昔悪事を共謀せし者の分れたる言を神妙に齎一に合せて、信者に三者を識ることを教へたり、我等彼に固められたり。

附唱 至聖三者、我等の神よ、光栄は爾に帰す。

又

イルモス 昔砕きたる心を懐ける預言女アンナが、主宰、睿智の神に奉りし一の祈りは、果を結ばざる腹の縛を釋き、子多き者より受くる勝へ難き辱を除きたり。

附唱 至聖三者、我等の神よ、光栄は爾に帰す。

至上神の為す所は悟り難し、蓋彼は無学の者を辯才の者と顛し、漁者を言にて智者に竭者、又聖神^oの光照を以て無数の民を深き黑暗より引き出す者と顛し給へり。

光栄は、今も

生れざる光より全能の竭きざる光は出づ、其固有の輝は、父の権に藉りて子を以て、今シオンに火を出す聲の中に諸民に顕る。

【小連禱】

輔祭 我等安和にして主に禱らん、

(詠) 主 憐れめよ

輔祭 上より降る安和と我等が^{たましい}霊の救いの為に主に禱らん、

(詠) 主 憐れめよ

輔祭 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光栄の女宰・生神女^{しょうしんじよ}・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記

憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、并にことごとくいのちの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、
(詠) 主 爾に

司祭 (高声) 蓋爾は我等の神なり、我等光栄は爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世に、

(詠) 「アミン」

坐誦讃詞 第八調

救世主を愛する者は歓喜に満ち、先に恐るる者は勇敢を獲たり、蓋今聖神^oは上より門徒の家に降りて、各人異なることを民に言へり、火の如く見ゆる舌は岐れて、彼等を焚かず、却りて露を注ぎたればなり。

第四歌頌

イルモス **ハリストスよ、預言者は爾が末の日に来らんことを預見してよべり、主よ、我爾の能力の事、爾が凡そ爾の膏つけられし者を救はん為に臨みしを聞けり。**

第4歌頌

ハリストスよ、預言者はなんじ爾が末の日に来たらんことを
預見してよべり 主よ、我爾がちから能力のこと
なんじ爾がおよ凡そなんじ爾のあぶら つけられしものを
すく救わんためにのぞ臨みしを聞けり

附唱 至聖三者、我等の神よ、光栄は爾に帰す。

曩に諸預言者に藉りて言ひ、律法に於て不完全の者に伝へられし撫恤者、眞の神は今言の役者及びせ證者に現れ給ふ。

附唱 至聖三者、我等の神よ、光栄は爾に帰す。

聖神^oは火の中に神性の標識を具へて、使徒等に分たれ、奇妙の舌を以て顛れたり、蓋彼は父より出づる神聖の力にて、親ら権柄を有つ者なり。

又

附唱 至聖三者、我等の神よ、光栄は爾に帰す。

イルモス 諸王ノ王、斯く大なる者よりする唯一の斯く大なる者、無原の父より生れし言よ、爾は恩主として、實に爾が同能の聖神^oを以て、主よ、光栄は爾の権柄に帰すと歌ふ使徒等に遣し給へり。

附唱 至聖三者、我等の神よ、光栄は爾に帰す。

嗚呼神の言よ、爾二性を合せたる者は言にて神聖なる重生の洗を建てて、我が為に爾の刺されたる不朽の膏より水を流し、聖神^oの温きを以て之を印し給ふ。

附唱 至聖三者、我等の神よ、光栄は爾に帰す。

万有は撫恤者と、父の子と、彼等と一性なる父との前に膝を屈む、蓋三位に於て實に近づき難き無原なる一体の者を見たり、聖神^oの恩寵が光を輝かしたればなり。

光栄は、今も

三光の性の役者は皆神が施す所の能力に満てらるべし、蓋ハリストスは恩主として、聖神^oの全き恩寵を賜ひて、天然に超えて完うし、照して、救を獲しめ給ふ。

第五歌頌

イルモス 主よ、爾を畏るるに藉りて、諸預言者の内に妊まれ、地に生れたる救の神^oは使徒等の心を浄くし、義なる者として信者の中に改めらる、蓋爾の誠は光なり、平安なり。

第5歌頌



主よ 爾を畏るるによりて、 諸預言者の
うちに ^は妊まれ 地に生まれたる救いの 神^oは
使徒等の ころを きよくし 義なる 者として
信者の内に あらためらる 蓋 爾の誠めは
ひかりなり へい安なり

附唱 至聖三者、我等の神よ、光栄は爾に帰す。

今降臨せし能力は至善の神^o、神の栄知多の神^o、父より出で、子に藉りて我等信者に現れて、其居處となる者に成聖を賜ふ神^oなり、此の成聖の中に其本性は洞察せらる。

又

附唱 至聖三者、我等の神よ、光栄は爾に帰す。

イルモス 教会の光を負ふ諸子よ、諸罪を除く潔浄、火の噴き出したる聖神^oの露を受けよ、今シオンより律法たる聖神^oの恩寵は、火の舌の形を以て出でたればなり。

附唱 至聖三者、我等の神よ、光栄は爾に帰す。

父と同能同性たる自主の聖神^oは、自ら望みし如く、父より出で、使徒等に方言を知るを賜ひて、救世主の宣べたる生活を施す言を印し給ふ。

光栄は、今も

全能の神言は使徒等の霊を罪より醫して、己の為に備へて潔き居處と為せり、今其中に彼と同能一性なる聖神[°]の光は入り給ふ。

第六歌頌

イルモス ハリストスよ、我世の慮の淵に漾ひ、我を覆へる諸罪の濤に溺れ、霊を滅す猛獣に擲たれて、イオナの如く爾によぶ、死を致す深處より我を引き上げ給へ。

第6歌頌

おもんばか
ハリストスよ、 我世の慮の淵に ただよ い
なみ たましい
我を覆える 諸罪 の波 に おぼれ 霊を 滅ぼす 猛 獣に
うたれて イオナの 如く なんじに よぶ
死を致す深みより 我を引き上げ たま え

附唱 至聖三者、我等の神よ、光栄は爾に帰す。

主よ、爾が預言せし如く、爾の聖神[°]より豊に凡の肉体に注ぎ給へり、乃万有は、父より爾が朽ちずして生れ、聖神[°]が分れずして出づるを知る智識に満てられたり。

附唱 至聖三者、我等の神よ、光栄は爾に帰す。

又

イルモス 主宰ハリストスよ、爾は我等の為に浄と救にして、童貞女より耀き給へり、預言者イオナを海獣の腹より救ひし如く、アダムの其悉くの陥りし族と偕に腐敗より救はん為なり。

附唱 至聖三者、我等の神よ、光栄は爾に帰す。

全能者よ、我が衷に至りて慕ふべき正しき神[°]を改め給へ、我等が彼、父より出でて父と一体なる者、朽つる物質の汚を焚きて、心を不潔より浄むる者を永遠に保たん為なり。

光栄は、今も

爾、父より生れし言の為に證する神[°]は、ンオンに於て爾の降臨を慕ふべき賜として待つ使徒等の中に火の息を以て入りて、昇邦の妄信の荒き迷を速に顧し給ふ。

【小連禱】

輔祭 我等安和にして主に禱らん、

(詠) 主 憐れめよ

輔祭 上より降る安和と我等が 霊^{たましい}の救いの為に主に禱らん、

(詠) 主 憐れめよ

輔祭 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光栄の女宰・生神女^{しょうしんじよ}・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記

憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、并にことごとくいのちの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、
(詠) 主 爾に

司祭 (高声) 蓋爾は平安の王及び我が霊の救主なり、我等光栄は爾父と子と聖神に献ず、今も何時も
世世に、
(詠) 「アミン」

小讃詞 第八調

至上者は降りて／舌をみだ濡しし時、諸民を分てり、／火の舌を頷ちし時、衆を一に集め給へり、
／故に我等 同一に至聖神^oを讃栄す。

同讃詞

イススよ、我等の霊の悶ゆる時、速にして真なる慰を爾の諸僕に與へ給へ、憂の時我等の霊を離るる
母れ、禍の時我等の心に遠ざかる勿れ、恒に我等を衛り給へ。我等に近づけ、在らざる所なき者よ、近
づけよ、恩廣き者よ、常に爾の使徒と偕に在るが如く、我等爾を恃む者と偕にし、我等に同一にして爾
を歌ひ。爾が至聖の神^oを讃栄せしめ給へ。

第七歌頌

イルモス 敬虔の少者は火の爐に擲たれて、火を易へて露と為し、歌を以てよべり、主我が先祖の神よ、
爾は崇め讃めらる。

第7歌頌



敬 虔しょうしゃの少者は 火いろりの炉に投げ う た れ て
火に易えて 露 と な し う た を 以 っ て よ べ り
我 が 先祖の 神よ、爾は 崇めほめらる

附唱 至聖三者、我等の神よ、光栄は爾に帰す。

使徒等が神の大事を伝へし時、信ぜざる者は聖神^oの感動を以て酒の酔と思へり、此の感動に藉りて三
者にして惟一なる我が先祖の神は現れ給ふ。

附唱 至聖三者、我等の神よ、光栄は爾に帰す。

我等は別れざる性たる無原の神父と、同権の言と、聖神^oとを正しく承け認めてよぶ、我が先祖の神よ、
爾は崇め讃めらる。

又

附唱 至聖三者、我等の神よ、光栄は爾に帰す。

イルモス 楽器の調和したる聲は、金にて鑄たる霊なき偶像を敬ふ為に響けり、撫恤者の光を施す恩寵
は、慶賀を設けて斯くよばしむ、惟一にして同能なる無原の三者よ、爾は崇め讃めらる。

附唱 至聖三者、我等の神よ、光栄は爾に帰す。

預言者の述ぶる所を曉らざりし無智の者は使徒等が異方の言を語るを聞きて、之を酒に因る酔と名づけたり、然れども我等虔誠の者は敬みて爾によぶ、世界を新にする主よ、爾は崇め讃めらる。

附唱 至聖三者、我等の神よ、光栄は爾に帰す。

神に感ぜられし預見者イオイリは至上なる神言が宣べたる神聖の教を轟かして曰へり、我が注ぐ所の神[°]を受くる者はよばん、三光の性よ、爾は崇め讃めらる。

光栄は、今も

神は第三時と雖一なる今の主日に恩寵を頒ち給へり、一性の中に三位を尊みて、子と父と聖神[°]よ、爾は崇め讃めらると云ふを教へん為なり。

第八歌頌

イルモス 火に圍まれて焚けざる棘シナイに於て舌吃り言洩るモイセイに神を顕し、又神に於ける熱心は三人の少者を火に焚かれざる者と顕して、歌はしめたり、主の悉くの造物は主を歌ひて、万世に讃め揚げよ。

第8歌頌

火に 囲まれて 焚けざるイバラ シナイにおいて
舌どもり、ことば洩るモイセイに神を あらわし
また 神における熱心は三人の少者を ^{みたり} 火に焚けざる者と ^や
^{あらわ} 顕わして 歌わしめたり 主の ^{ことごと} 悉くの造ぶつは
主をうたい 万世に 讃め 揚げよ

附唱 至聖三者、我等の神よ、光栄は爾に帰す。

至聖神[°]の生命を施す強き吹嘘が烈しき聲を以て上より火の舌の形にて漁者に降りし時、彼等は神の大事を伝へて言へり、悉くの造物は主を歌ひて、万世に讃め揚げよ。

附唱 至聖三者、我等の神よ、光栄は爾に帰す。

我等觸るべからざる山に登る者として、嚇す火に畏れず、来りて、シオン山に生活の神の城に立ちて、聖神[°]を戴ける門徒と偕に今よばん、悉くの造物は主を歌ひて万世に讃め揚げよ。

附唱 至聖三者、我等の神よ、光栄は爾に帰す。

又

イルモス 至上神の三光の像は縲紲を釋き、焰に露を注ぐ、少者は歌ひ、凡そ造られし者は唯一の救世

主及び造成主を恩者として崇め讃む。

附唱 至聖三者、我等の神よ、光栄は爾に帰す。

聖神[°] は日の舌の形を以て降り、使徒等の記憶の中にハリストスが父より聞きて、彼等に宣べたる救の教を堅め給ふ、崇め讃めらるる者よ、先に神に疎んぜられ、今親しくなりし造物は爾を尊み歌ふ。

附唱 至聖三者、我等の神よ、光栄は爾に帰す。

己の旨に依りて降りて救を施す神[°]、自ら輝きて光照を賜ふ光よ、爾は聖なる吹嘘の如く来りて、使徒等の中に入り給へり、祈る、爾の諸僕にも此の吹く嘘を豊に予へ給へ。

光栄は、今も

王よ、諸預言者の神[°] に感ぜられし口、及び父の懐より出でし神[°] 造られずして自ら造成者たる主、爾と。宝座を同じくする者は、爾が肉体を以て来るを歌へり、此の神[°] は爾より遣されて、諸信者に爾が人と為りしを承け認めさせ給ふ。

※「ヘルウィムより尊く」を歌はず。

第九歌頌

イルモス 産の時に損を試みずして、万能の言に肉体を予へし夫なき母、生神童貞女、容れ難き者の居處、限りなき爾が造成主の住所よ、我等爾を崇め讃む。

第九歌頌

産のときに 損ないを 試^{ころ}みずして 万能の
ことばに 肉体を与えし 生神女
容れがたき者の 居どころ 限りなき爾が 造世主の
すまいよ われら なんじを 崇め讃む

附唱 至聖三者、我等の神よ、光栄は爾に帰す。

昔火の如き熱心者は火焰の車にて飲び升りて、今上より使徒等を照しし吹嘘を預象せり、彼等は此に照されて、衆人に三者を顕せり。

附唱 至聖三者、我等の神よ、光栄は爾に帰す。

其性の法に因らずして、門徒等より奇妙の事は聞えたり、蓋聖神[°] の一の聲が恩寵を以て種々に宣ぶる時、諸氏諸族諸邦は神の大事を聆きて、三者を識るを得たり。

又

附唱 至聖三者、我等の神よ、光栄は爾に帰す。

イルモス 女王、至栄の母たる童貞女よ、慶べ、如何に滑なる能辯の口も辯を盡し、宜しきに合ひて爾を歌ふ能はず、如何なる智慧も爾の産を悟るを得ず、故に我等心を一にして爾を讃栄す。

女王、至栄の母たる童貞女よ、よろこべ
 いかに滑らかなる能弁のくちも宜しきにかないて
 爾を歌うあたわらず如何なる智恵も
 爾の産を悟るを得ず
 故に我等心をひとつにして爾を讃栄す

附唱 至聖三者、我等の神よ、光栄は爾に帰す。

生命を予ふる少女を歌ふこと宜しきに合へり、蓋彼は獨、人の病みたる性を醫す言、今父の右に坐して、聖神^oの恩寵を遣しし主を其腹に宿し給へり。

光栄は、今も

我等神が注ぎし恩寵に活かされたる者は、皆光照せられて輝き、奇妙に至美しく変化せられたる者となりて、同能なる、分れざる、睿智の三光の性を識りて、之を讃栄す。

嗣ぎて共頌、兩「イルモス」を歌ふ。

【小連禱】

- 輔祭 我等安和にして主に禱らん、 (詠) 主 憐れめよ
 輔祭 上より降る安和と我等が^{たましい}靈の救いの為に主に禱らん、 (詠) 主 憐れめよ
 輔祭 至聖至潔にして至りて讃美たる我等の光栄の女宰・^{しょうしんじょ}生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、并に^{ことごと}悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、 (詠) 主 爾に
 司祭 (高声) 蓋天の衆軍爾を讃揚す、我等も光栄は爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世に、 (詠) 「アミン」

※「主我等の神は聖なり」歌わない

【差遣詞】

父より出で、子を以て無学の門徒に降りし至聖なる神^oよ、爾が神なるを識りたる衆を憐みて救ひ給へ。

光栄 今も

父は光なり、言は光なり、火の舌の形にて使徒等に遣されし聖神^oも光なり、彼に藉りて全世界は照されて、聖なる三者を尊むことを教へらる。

祭 11

【讃揚歌とスティヒラ】

【凡そ呼吸ある者】に六句を立てて、自調の讃頌を歌ふ、第四調。



およそいきあるものは主をほめあげよ 天より主を
ほめあげよ いとたかきにかれをほめあげよ
ほめ歌は汝 かみに帰す そのことごとくの神使や
かれをほめあげよ そのことごとくの軍やかれをほめ
あげよ ほめ歌はなんじかみに帰す

衆民今日ダウィドの城に、聖神^oが火の舌にて降りし時、至榮なる事を見たり、神言者ルカの述ぶるが如し、蓋曰ふ、ハリストスの門徒の集まれる時、聲ありて、迅しき風の度るが如し、彼等が坐せる所の家に満てり、皆異なる言、異なる教、聖三者の異なる誠を宣へ始めたり。二次

聖神^oは常に在りき、又在り、又在らんとす、始めらるるなく、息めらるるなく、常に父及び子と一性一体なり、彼は生命及び生命を賜ふ者、光及び光を施す者、自ら善及び善の泉なり、彼に依りて父は知られ、子は崇められ、聖三者の唯一の力、唯一の性、唯一の伏拝は衆人に識らるるなり。二次

聖神^oは光及び生命なり、神経の活ける泉なり、睿智の神、知識の神^o、善にして義なる聡明の神^o、権ありて罪を潔むる者、神及び神に合する者、火にして火より出づる者、預言し、行動し、賜を分つ神^o、彼に藉りて衆預言者及び神聖なる使徒は致命者と偕に榮冠を冠れり、異なる聞、異なる見、別れて恩賜を配分する火なり。二次

光榮 今も 第六調



光榮は父と子と聖神に帰す今もいつも世世にアミン

天の王、慰むる者よ、真実の神^o、在らざる所なき者、満たざる所なき者よ、万善の宝蔵なる者、生命を賜ふ主よ、来りて我等の中に居り、我等を諸の穢れより潔くせよ、至全者よ、我等の霊を救ひ給へ。

→通常部分 P22 に戻る 【大詠頌】を歌う

大頌栄、「聖なる神」を歌った後

祭 12

【祭日トロパリ】 8調

崇め讃めらるる哉ハリストス我等の神よ、爾は漁者に聖神[°]を遣して睿智者と為し、彼等を以て世界を漁し得たり、人を愛する主よ、光栄は爾に帰す。

讃美^{サンビ}たるかな^{ハリス}トスわれらのかみやなんじ使徒^{シト}に聖神を
 つかわすをもって智慧^{チエ}ふかき漁者^{ギョジャ}となしかれらにてせ
 かいを漁^{ギョ}し得たりひとをあいする主や光えいはな
 じにきす

→通常部分 P27 に戻る

【重連祷、増連祷】 早課の終わり。發放詞。

一時課

<一時課の変更箇所は、トロパリコンダクのみ>

【トロパリ】 第8調。

崇め讃めらるる哉ハリストス我等の神よ、爾は漁者に聖神[°]を遣して睿智者と為し、彼等を以て世界を漁し得たり、人を愛する主よ、光栄は爾に帰す。

【コンダク】 第七調。

至上者は降りて舌^{みだ}を清しし時、諸民を分てり火の舌を頌ちし時、衆を一に集め給へり、故に我等 同一に至聖神[°]を讃栄す。

※祈祷の最後に上記の「祭日トロパリ」を歌う場合もある。